第 19 回ウイルス学キャンプ in 湯河原　開催のご案内

主催：ウイルス学キャンプ実行委員会
共催：日本ウイルス学会、JSPS 研究拠点形成事業 Core-to-Core Program
「ウイルスの二面性の理解・活用のための国際研究拠点形成」

日時：2025 年 6 月 16 日（月）12:40　～　6 月 17 日（火）12:00 まで（予定）
場所：ニューウェルシティ湯河原
静岡県熱海市泉 107　　TEL：0465-63-3721
http://www.welcity-yugawara.co.jp/
湯河原駅（JR 東海道本線）下車、バス（奥湯河原行・不動滝行　約 7 分）
対象：　主に若手研究者（大学院生、学部生、ポスドク、教職員/常勤研究者など）。
非ウイルス学会員の参加も歓迎。研究を真剣に行っている・行いたい方。
定員：　計 50 名（先着順で、定員になり次第締切らせていただきます）
費用（予定）：　参加費 2,500 円 ＋ 宿泊費 10,500 円

はじめに：「ウイルス学キャンプ」とは？

「ウイルス学キャンプ」は日本ウイルス学会 若手研究者育成プログラムの一環として 2004 年から始まった一泊二日の研究会で、古くより多くの芸術・思索が生み出された湯河原町で開催しています。全国の大学・研究機関等に所属する大学院生・学部生・ポスドク・若手教職員に、招待演者と世話人を加え、例年 50 人程度で開催しています。世話人も居ますが、一般参加者の方々には基本的にご自身がこの会に積極的に参加いただくスタイルです。ご自身の研究を口頭あるいはポスター発表、聴衆からのフィードバックを得るだけでなく、他の発表にも遠慮なく議論いただく機会となっていますし、今後求める企画・発案ももちろん welcome です。

大きな学会では発表だけで終わってしまい、いまひとつ深い話をするきっかけがないと感じている方、研究室外の人たちや先生から本音の意見やアドバイスが欲しい方、同じ境遇の知り合いを求めている方、ほかにもコロナ禍での外出の億劫さから一歩踏み出したい方、コミュニケーション不足を感じている方など、そんなみなさんの要求に応える会です。今後のご自身に重要な出会いとなるかもしれません。時間の制約をできるだけ払い、参加して良かったと思って帰っていただければ幸いです。

若手のための会ですが、若手に特に定義があるわけではありません。日本ウイルス学会員限定の会でもありません。ご興味あるみなさま方の、ご参加をお待ちしています。

おおまかなプログラム：

＜　6 月 16 日（月）＞

＊招待講演　　～　新進気鋭の研究者から最新の研究のお話　～

1. 演題：「臨床データと基礎ウイルス学の融合による
Epstein-Barr ウイルスが引き起こす疾患の理解」
名古屋大学大学院　医学系研究科　ウイルス学分野　准教授　佐藤 好隆 先生

Epstein-Barr ウイルス(EBV)はヒトヘルペスウイルスの一種で、成人の 90%以上が既感染である“ありふれた”ウイルスである。しかし、EBV は B 細胞や NK 細胞などのリンパ球から上皮細胞で検出され、リンパ腫や上咽頭癌などの原因にもなる。近年では多発性硬化症や自己免疫疾患の発症に関与することも報告され、EBV が関与する疾患は多岐に渡る。
本講演では、EBV 関連疾患のひとつである慢性活動性 EBV 病を中心に、感染細胞がどのように出現し、ウイルスがどのように疾患を引き起こしていくのかについて紹介する。

2. 演題：「石の上にも 15 年」
国立研究開発法人　農業・食品産業技術総合研究機構　生物機能利用研究部門
作物生長機構研究領域　作物病害制御機構グループ　上級研究員　石橋 和大 先生

大学 3 年後期に研究室に配属になったとき、石川雅之助教授（当時）に提案していただいた研究テーマの中に「トマト *Tm-1* 遺伝子の同定」があった。ウイルスが感染できないトマトの細胞抽出液からウイルス複製阻害タンパク質を精製して原因遺伝子を同定するという野心的なテーマであったが、右も左も分からない私にはとても魅力的に思われ、迷うことなくそれを選んだ。四苦八苦しつつどうにか博士課程 2 年次に遺伝子同定に至ったが、幸か不幸か機能既知の遺伝子とは配列相同性を示さなかったため、どのように機能しているかは分からなかった。その後機会に恵まれ、様々な角度から *Tm-1* 遺伝子の機能解析を行うことができた。本講演では一つの遺伝子にかじりついた 15 年間を振り返りたい。

＊口頭発表　（発表時間は 15 分程度）　～ 希望者から数名選出させていただきます ～

＊ポスター発表　　～ 口頭発表以外の一般参加者は基本的に全員ポスター発表をお願いします。発表データがない方は現在進行中/今後の計画などでも ～

＊夕食、お風呂

＊班別討論（ポスターないと）

＜　6 月 17 日（火）＞

＊いま話題のウイルス研究　　～ ウイルス研究の多面性を考える ～

4. 演題：「空間浮遊ウイルスの検知とリスク分析」
　国立研究開発法人 産業技術総合研究所
　センシング技術研究部門・総括研究主幹　福田 隆史 先生

　我々は空間に漂うウイルスを捕集し、その分析を行うことで当該空間のウイルス濃度を推定する技術の開発を進めている。定点で経時的なモニタリングを行えば、時間軸での消長把握が可能となる。また、同一時刻に複数箇所でモニタリングを行えば、空間分布が把握できる。目に見えないウイルスの空間濃度や分布を可視化することが可能となる。そして、それらの分析結果に基づけば、2 次感染リスク評価、早期の予防措置、終息の判断などを行うことが可能となると期待される。本講演では、これまでに我々が進めてきた取り組み事例と共に、今後の展開（大風量のウイルス不活化装置も含めた先進防疫システムの開発）についてご紹介させて頂く。

＊テクニカルセミナー　　～ 役立てよう、こんな技術を使いたい！ ～

5. 演題：「オルガノイド、どういうときに使うか？どうやって使うか？」
　東京科学大学　総合研究院　難治疾患研究所
　人体模倣システム学分野　教授　高山 和雄　先生

　ウイルス研究においてもオルガノイドという単語が普及しつつあります。しかしながら、実際にオルガノイドを使用しているウイルス研究者の数はまだ少ないのが実情です。オルガノイドがどのような場面で必要とされ、どのような手続きを経て使用できるかが分かりづらいために、ウイルス研究においてオルガノイド技術が普及しづらいと考えられます。本日の講演では、オルガノイドをどういうときに使うのか？どうやって使うのか？未経験者でも使えるのか？使用するメリットはどのくらいあるのか？などの問いに対する回答を提供できればと考えております。

＊いまだから聞けるウイルス学講座　　～ 華々しい研究の場面から舞台裏まで ～

3. 演題：「麻疹ウイルスとその仲間たち」
　東京大学大学院医学系研究科・医学部 微生物学　教授　竹田 誠 先生

　麻疹ウイルスは最も伝染力が強いウイルスである。病原性も強く、発展途上国では致死率が数%、先進国でも約 0.1%と高い。麻疹ウイルスは人に感染するモルビリウイルスである。モルビリウイルス属には他にも牛、犬、クジラ、アザラシ、コウモリなどのそれぞれに感染するウイルスがあり、宿主域ははっきりしている。ただし、動物目を超えたアウトブレイクを起こすこともある。SLAM とネクチン 4 という二つの分子を共通の受容体としている。驚くべきことに、麻疹ウイルスは抗原性が全く変化せず、半世紀以上前から使用されている生ワクチンの効果は、少しも低下していない。その一方、モルビリウイルス間においての抗原性の交差性は低い。本講演では、麻疹ウイルスとその仲間たちについてウイルス学的視点から深掘りしてみたい。

詳細なプログラムは後日、参加者に直接お知らせします。
なおコロナ対策の都合上、参加者の方々は当日検温を実施いただき、熱発などがないことを確認の上でご参加ください。

【参加申込方法】

以下の書式にご記入いただき、電子メールで下記までご連絡下さい。

【宛先】

e-mail: **virology-camp*nih.go.jp　(*を@に変更して送信ください)**

ウイルス学キャンプ in 湯河原 事務局
渡士 幸一（国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所 治療薬開発研究部）

【締切】2025 年 5 月 16 日（金）　※1週間延長しました。

（応募書式）

第 19 回　ウイルス学キャンプ in 湯河原　参加申込書

氏名：(フリガナもお願いします)
性別：(部屋割りを決めるために記入お願いします)
所属：
職位：(学生、大学院生の場合は学年も)
e-メールアドレス：
発表演題名：
希望発表形式：(1. 口頭セッション　2. ポスターセッション　3. おまかせ)
要旨（200 字程度）(希望発表形式 1 or 3 の場合にご記入ください)：
宿泊部屋の希望：1. シングル　2. 大部屋（4~5 人）　※1

※宿泊部屋については限りがありますので必ずしも希望の通りとならない場合がありますことをご了承ください。

みなさまの多くのご参加をお待ちしています。

ウイルス学キャンプ世話人一同
（小林 進太郎、川口 敦史、モイ メンリン、佐藤 佳、一戸 猛志、立川 愛、鈴木 忠樹、
森石 恆司、村田 貴之、岩谷 靖雅、野田 岳志、高田 礼人、川口 寧、渡士 幸一）